

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 SHARIFI Ayyoob

論文題目 Sustainability at the Neighborhood Level:

Assessment Tools and the Pursuit of Sustainability

(近隣地区スケールの持続可能性 :

評価ツールと持続性の追求)

論文審査担当者

主査 名古屋大学大学院環境学研究科准教授 村山 顕人

委員 名古屋大学大学院環境学研究科教授 清水 裕之

委員 名古屋大学大学院環境学研究科教授 片木 篤

論文審査の結果の要旨

本論文は、近年、都市プランナーや意思決定者の間でその重要性の認識が高まっている米国の LEED-ND、英国の BREEAM Communities、日本の CASBEE-UD に代表される近隣地区を対象とする持続可能性評価ツールの理論と事例を分析している。これまで個々の建物を対象とする持続可能性評価に関する研究及び実務の蓄積はあるが、建物、建物と建物の間、公共空間等で構成される近隣地区の持続可能性評価ツールの分析・評価・改善に焦点を当てた論文は少ない。

本論文は7章で構成されている。第1章で研究の背景、方法、意義を記述している。第2章・第3章では、文献調査を通じて、持続可能性のアプローチ及び原則と影響評価理論の展開過程を整理し、近隣地区の持続性評価をより広い文脈の中で位置づけている。第4章では、文献調査を通じて、20世紀初頭以降の近隣地区の概念の展開を概説し、近隣地区の計画は、研究・実務両面で1世紀以上の取り組みがあるにもかかわらず、持続可能性の主要な課題に未対応であることを論じている。第5章では、各種資料に基づく内容分析を通じて、ヨーロッパ、米国、オーストラリア、日本で適用されている7つの代表的な近隣地区の持続性評価ツールについて、持続可能性の対象範囲、前提条件、地域適応性、点数化と重み付け、参加、報告、適用可能性という視点から批判的に分析している。対象としたのは、オーストラリアの SCR、EU の ECO-City、EU の HQE²R、英国の BREEAM Communities、日本の CASBEE-UD、米国の EarthCraft Communities、米国の LEED-ND である。これらのツールは、重み付け、点数化、順位付けにあいまいさと欠点があること、多くの評価ツールは地域への適応と参加の仕組みがないこと、適応可能性についてはより広いプランニングの枠組みに埋め込まれている評価ツールのみがうまく対応していることを示した。第6章では、近隣地区の持続可能性評価の実態を理解し、評価ツールの特徴を明らかにするために、米国、英国、日本においてそれぞれ LEED-ND、BREEAM Communities、CASBEE-UD において高く評価された3つの事例（Hoyt Yards、MediaCityUK、越谷レイクタウン）の分析を行っている。事例分析は、各事例と持続可能な開発の原則の対応に関する分析と、各事例を実際に適用された自国のものではない他の2つの評価ツールを用いてクロス評価する比較事例分析で構成されている。

本研究の主要部分である第5章・第6章により、各事例の共通点と相違点、長所と短所が明らかになった。実務では持続可能性の環境的側面が支配的で社会的、経済的、制度的側面が適切に取り扱われていないこと、認証された開発のアフォーダビリティはいずれの事例においても確保されていないこと、BREEAM Communities や CABEE-UD に比べて LEED-ND が広く普及している背景には都市開発関係主体の協働、政府・自治体による活用、高さ・密度ボーナスや補助金の付与等のシステムとの連携があること、LEED-ND の評価項目の重み付けの偏重は開発業者が重み付けの重い評価項目のみに対応する傾向を促していること、その問題の軽減には CASBEE-UD のように評価項目の群に重み付けをする方法の採用が有効であること等を示した。

以上のように、本論文は、近隣地区を対象とする持続可能性評価の理論を整理した上で、持続可能性評価ツールとその適用事例の分析を通じて評価ツールの諸課題を特定し、当該分野の今後の展開に寄与する貴重な知見を示しており、学術上、工業上寄与するところが大きい。よって、本論文の提出者、SHARIFI Ayyoob 君は博士（工学）の学位を授与される資格があるものと判定した。